『星と月は天の穴』(3)

――不在証明としての「作品」――

榊原英城

〈本稿を 故森田秀樹君に捧げる〉

一人の青年が死んだ。森田秀樹君。平成元年3月，経済学科卒業。平成5年2月1日，病死。享年27歳。――森田君，話が違うよ。君が私の葬式に来てくれるはずじゃなかったかい？ ……基礎演習で，コンパの席で，君の語る姿が今も目に浮かぶ。いつまでも君のことを忘れないように，この稿を君に捧げる。

本稿は十年以上も前に本論集に発表した「『星と月は天の穴』――吉行淳之介研究（Ⅰ）」の続稿である。いくつかの事情によって[1]，二回で中断したままになっていたが，ここに再び書き継ぐことにしたのは，『星と月は天の穴』を始めとする吉行淳之介の作品群，及びそれらを扱う方法的試みへの私の愛着のためである。また，この十年ほどの吉行文学研究の推移を見ると，本稿を中断した頃とさほど大きな進展はないように感じられ，むしろ，読み直しの試みは以前にも増して必要と思われるためでもある[2]。そこで，副題を改めて[3]，断続的に書きつづけることにした。長い期間を置いた故，幾分ぎくしゃくするだろうが，引きつづき『星と月は天の穴』という作品を読んでゆきたい。但し，私は作品を分析し，そこから何かの意味を解き明かしたいわけではなく，ゆっくりと愛撫するように，ただ作品をなぞること，できうる限り長いこと作品と戯れることをしようと思っているだけである。

以下は第一回の「初出と初版」，第二回の「矢添の部屋」，「小公園とブランコ」に続くものである。

外の世界へ

三章は初出の一章に当たり，矢添の外の世界での行動のはじまりの章である。書き直しの理由として，作者自身が「以前の作品では，主人公が外へ出て他人と交渉を持つ，その交渉の在り方だけしか書かれていなかった」[4]と述べているとおり，初出では矢添の外の世界とのかかわりに重点が置かれていたわけだ。初版での加筆訂正は矢添の内面の心象にかかわる個所にほぼ限られ，外の世界での矢添の行動に大きな変更はない。しかし，矢添の「心象を具象化するため」[5]設定された小公園が書き加えられたことによって，外の世界で起こる事柄は矢添の内面の世界から逆照射されて別の相貌を帯び，その結果，書き直された作品は初出とはかなり異なった作品世界を構成することになった。

さて，外の世界は矢添にとってどのような相貌を示すであろうか。いくつかの場面でそれを見てゆこう。

矢添は部屋を出る。「空腹を感じた」[6]ので食べ物を買いに食料品店へ行くのが直接の目的である。その店で知人と出会い，会話を交す，それが三章の内容となっているわけだが，初出において冒頭の章であった名残りか，この章にはのちに展開されることになるいくつかのモチーフがさりげなく隠蔽されている。例えば，知人の意味，矢添の年齢，矢添の欲望とその性格，若い娘と中年の男……

> 食料品店の窓ガラスの向うに，焼いた鶏の焦茶色と鮭の肉の淡紅色が見えている。出入り口の扉を押す前に，矢添克二は立止って，ガラス越しに店の中をしばらく眺めた。〔……〕
>
> そのとき，彼の肩を叩く手があった。
>
> 振向くと，同じ年輩の男が，笑顔で立っていた。この男とは，時折この

店で出会う。大学時代の同級生だが，いつもは二こと三こと言葉をかわすだけだった。その男がいま弁護士をしている，という程度のことしか，矢添は知らない[7]。

外の世界で矢添が出会い，口を利く人間として作品のなかで最初に描かれるのが，この同級生の知人なのだが，この男には固有名詞が与えられていない。そのことはこの男が，作品中ただ一度だけ姿をあらわすにすぎぬ，さほど重要ではない人物であるという理由から来るのではない。むしろ，この男はかなり重要な人物だと考えなくてはならないのだ。矢添とこの男との会話は，矢添という人間の社会に対する姿勢を明瞭に示すために欠かすことができない場面と考えられるからである。つまり，この男は矢添と同年代の人間の一つの典型，世間的通念どおりのまっとうな考えを持つ生活者の代表としての意味を担った存在として描かれているのだ。固有名詞が避けられているのはそのためであろう。このことは，作品のなかで，より重要な役割を持つ矢添の別れた妻が，矢添の過去の傷の象徴としての重い意味を担わされた存在であるにもかかわらず，むしろそれ故に固有名詞で指示されることが一度もないのと揆を一にしている。

一見，何気ない二人の会話は，のちに展開されるいくつかのモチーフに繋がってゆく。

「お互いにラクじゃないね，このごろは買物は男の仕事になってきたようだ。」

友人は愉しそうにそう言う。〔……〕

「娘の誕生日でね，この店の鶏の丸焼は評判だから……」

「それは，どうも」

矢添がそう言うと，友人は笑顔のままで，

「可愛い娘だよ。円満な家庭というのも，いいものだよ」

〔……〕円満な家庭を羨む気持はない。結婚生活を思い出すと，苦い味が舌に拡がる。〔……〕[8]

この友人が体現しているような家庭や結婚生活についての世間的通念に対する拒絶反応が，小説家矢添の生への姿勢の暗黙の前提をなしているらしいことは，はっきりそれと明言されているわけではないにしても，友人との会話の推移から容易に推測できよう。友人は，従って，部屋のなかに引き籠り，つねに自己と向き合っている現在の矢添とは対極的な場所に位置する存在であると考えられる。

二年余りの間を置いて，昭和44年に書きはじめられる『暗室』の主人公であり，矢添と同じく小説家でもある中田の抱いている結婚や生殖への強い拒否反応こそ，まだここにはあらわれていないが，それと同質の意識を矢添もまた持っていると思われる。円満な結婚生活への矢添の拒絶反応は，当然ながら子供を持つことへのためらいに繋がるだろうからだ。それが矢添の，過去に囚われ，未来へ向かわない姿勢から来ていることは改めて言うまでもない。

さて，友人との会話は続き，矢添は成り行き上，注文しておいたチーズケーキを友人に「半分だけ」譲ることになる。

「もっとも，この菓子は酸味が強くて，子供向きとはいえないが」
「子供向き……」
「今夜の主役は娘さんなのだからね」
「娘だが，子供じゃないよ，十七歳だ」
「ほう」
「そういうことになるさ。学校を出てすぐに結婚したんだからね。お互に，もう齢だよ」
「そうだ，その通りだ」

「君は子供はいないね」

「いない」

「だから，うっかりしている」

「十七歳か。厄介な年頃だな」

「はやく，しかるべきところに嫁にやってしまおう，とおもっている。物騒だからね」

「まったく，物騒だ」[9]

矢添と友人との会話は，友人の家庭生活の雰囲気を浮き彫りにしながら，矢添の現在の年齢という，このあと展開されるモチーフの一つにさりげなく触れてゆく。既に二章において，矢添がいま書きつつある小説の主人公と同じく四十歳であることは明記されていたのだが，その年齢に対する矢添のこだわりが直接述べられていたわけではなかった。若い娘との接触を契機として，矢添の年齢へのこだわりは章を追うごとに重みを増してゆくが，その端緒となるのが，ここで友人が何気なく口にする「もう齢だよ」というひと言なのである。あからさまに年齢へのこだわりを表わすことを避けるためか，初版十四章の一頁程，矢添が自らの年齢について思案を巡らす部分が削除されている[10]。時間への神経の集中，入歯への過剰な拘泥が，矢添の年齢への意識を自然に表現しえているからであろう。

さて，矢添は結局，友人にただ調子を合わせて応じるだけで，心を開くことなく，一方，友人もまた，矢添が「物騒」なことをしかねない人間だとは思ってもみない。そして，結局，外の世界で最初に出会う人物であり，世間的な顔を持つこの友人に対し，矢添は心を閉ざしたまま擦れ違う。外の世界での矢添はまだ，吉行作品に現れる多くの男たちと同じく「心を自分の部屋に置いたまま」[11]なのである。

だが，そのことは矢添の関心が自己の内面のみに向っており自閉的になっているということとは少し違う。矢添は自己防衛的であるとは言え，その感

覚は外界に対して閉ざされているどころか，つねに目は外に向かって開かれ，外界のもたらす感覚的刺戟には敏感に反応する。部屋が矢添の精神であり，そこにあっては矢添は肉体を持たないかのような存在であるのに対し，外の世界は専ら肉体に属する世界なのである。色とりどりの食品の並んだ店があり，酒場の入口には灯がともり，欲望の対象としての女体が潜んでいて，矢添の感覚はその一つ一つに鋭敏に反応する。

女店員の持っている大きな包丁が，その重味だけでやわらかいチーズ菓子の中にゆっくり喰い込んでゆく。馴れぬ仕事に上気しているのか，女店員の耳朶が薄赤くなっている。うぶ毛が銀色にひかり，耳の穴の傍にホクロが一つ見えている。不意に，矢添克二は，まだ会ったことのない友人の娘の若い裸を想像し，鋭い欲情を覚えた[12]。

三章はここで閉じられ，以下の章における矢添の外の世界での行動を準備する。友人の娘に感じた欲情は，矢添にそれを解消するための行為を促すとともに，やがて矢添の前に若い娘が出現するであろうことを予感させる。

〔注〕

1) 一つには，昭和53年に刊行された『夕暮まで』がよく売れたことによって，「夕暮族」という流行語が生れたり，一時的な吉行淳之介ブームとでもいう事態が続き，暫くはその推移を見守った方がいいのではなかろうかと考えたこと，また，昭和58年から60年にかけて，新たな『吉行淳之介全集』が講談社から刊行され，収録作品に作者による改訂がなされたことも一因ではあるが，書き継ぐことができなかったのは，言うまでもなく筆者の怠惰などの個人的な事情が最大の理由である。

2) 例えば，最近話題になった上野千鶴子，小倉千加子，富岡多恵子の三氏による鼎談『男流文学論』（筑摩書房，平成4年）は，6人の男流作家を俎上に載せ，その作品と作品評を快刀乱麻を断つ鮮やかさ（？）で批評・断罪したもので，吉行淳之介の作品もその対象となっている。（但し，取りあげられたのは，『砂の上の植物群』，『驟雨』，『夕暮まで』の三作で，『星と月は天の穴』についての言及はない。）フェミニズム批評の実践を意図としたこの書物の内容に差し当たり触れる予定はないが，この書物の捲き起こした波紋はなかなか興味深いものであった。その事情は同

じ三氏による座談会「『男流文学論』の書評を総点検する」（『中央公論』平成3年7月号）や，『男流文学論』の編集にあたった藤本由香里氏による「『男流文学論』批評における男のスタンス」（『早稲田文学』平成3年9月号）に詳しい。

3） 吉行淳之介の早い時期に「不在証明の文学」という標題のごく短い文章がある。〔「文学生活シリーズ」③『雑踏のなかで』（潮出版社，昭和58年）に収録。初出は『東京新聞』昭和30年1月16日夕刊。〕その文章で述べられていることとかかわりなく，その標題は長く私の頭に引っ掛かっていて，借用することになった。「不在証明の文学」の後半部分を引用しておく。

「おもうに，これらの作者〔ゴンチャロフとチェーホフ〕はその人生のごく若い時期において，一度は生を選ぶか死を選ぶかの別れ路に立たざるを得ない構造をもった人間であったに違いない。

二人ともある程度の年配まで生きた人だから，生の方を選んだことになるわけだが，しかし実人生において自分を殺して作品の中で自分を主張してゆくことに救いを発見して，生きることにしたように見える。作品の中の自分にすべてのエネルギイがそそがれる。そのことは，余計者であることを認識した人間の，人生にたいする復讐ともいえる。

しかし，このことが十分にできれば，結果として，先に述べたように不在証明の文学としての役を果すことにもなるわけだ。僕は半ば無意識ながら，いままで体質的にかなりガンコにこの道を歩んできた。もっとも，それは下手くそであまり効果があがらなかったが，あと二十年も歩みつづければいくらかものになりはしまいか。」

4） 『星と月は天の穴』（講談社，昭和41年），「あとがき」。

5） 同書，「あとがき」。

6） 『星と月は天の穴』（講談社文芸文庫），p. 15（初版，p. 13）。引用文は前回は定本と考えられた講談社文庫に拠り，加えてカッコ内に初版の頁をも記した。が，その後，『吉行淳之介全集』（全17巻，別巻3，講談社，昭和58—60年）の刊行にあたり，著者による字句の訂正がなされた。『吉行淳之介全集』（以下，「全集」と略記）第8巻を底本として，講談社文芸文庫『星と月は天の穴』（以下，「文芸文庫」と略記）が平成元年に出版されている。現在，入手可能な『星と月は天の穴』のテクストは文芸文庫版のみであるので，ひとまずこれを定本とみなし，引用はこれに拠る。なお，全集での訂正については補遺として比較表を末尾に掲げた。

7） 同書，p. 16（p. 14）。

8） 同書，p. 17—19（p. 15—17）。

9） 同書，p. 19—20（p. 17—18）。

10） 『星と月は天の穴』，初版，p. 93—94。

11）『男と女の子』，全集第3巻所収。
12）『星と月は天の穴』，p. 20（p. 18—19）。

〔補　　遺〕

『星と月は天の穴』は初版以後，次の8種類の版がある。

〔A〕『吉行淳之介長編全集』，昭和43年11月，新潮社。
〔B〕『星と月は天の穴』，昭和45年9月，講談社。
〔C〕『星と月は天の穴』，昭和46年7月，講談社文庫。
〔D〕『吉行淳之介全集』第6巻，昭和46年8月，講談社。
〔E〕現代の文学19『吉行淳之介集』，昭和47年2月，講談社。
〔F〕『星と月は天の穴』，昭和48年3月，広済堂出版。
〔G〕『吉行淳之介全集』第8巻，昭和58年12月，講談社。
〔H〕『星と月は天の穴』，平成元年6月，講談社文芸文庫。

このうち〔A〕から〔F〕までの異同については，本稿第一回に掲げたが，今回，〔G〕（以下，全集版），〔H〕（以下，文芸文庫版）における改訂の意図を探るため，異同を調べてみた。なお，全集版の解題には，底本は講談社文庫版であると明記され，「収録にあたっては，著者の校閲を経，一部改稿した箇所もある」とあり，文芸文庫版では全集版を「底本とし，多少ふりがなを加えた。」との注記がある。以下に講談社文庫版から文芸文庫版に至る字句訂正の比較表を掲げるが，殆どは送りがなや漢字などの細かな訂正で，大きな変更はない。但し，見落としなのではないかと思われる個所もあり（一例——文芸文庫版，p. 157.「巻き込まれてゆく。」），今後，訂正されることも考えられる。振りがなについては前回と同じく，異同とは考えず，表からは除外した。

文芸文庫版でのページ・行	講談社文庫版	全集版
p. 7 l. 3	タバコの罐	タバコの缶
p. 7 l. 5	ダイニング・ルーム	ダイニングルーム
p. 8 l. 10	確かに	たしかに
p. 9 l. 12	蘇って	甦って
p. 9 l. 13	浮かし,	浮し,
p. 9 l. 16	顔のほうに却って	顔のほうには
p. 10 l. 6	僅かだが	わずかだが
p. 10 l. 10	殆ど	ほとんど
p. 11 l. 8	見下している	見下ろしている
p. 11 l. 16	なるまい」	なるまい」。
p. 12 l. 3	女子大学生	女子大生
p. 12 l. 7	上眼使い	上眼遣い
p. 12 l. 11	現れる	あらわれる
p. 13 l. 10	オーナー・ドライバー	オーナードライバー
p. 15 l. 5	投出して,	投げ出して,
p. 15 l. 12	突き抜けて	突抜けて
p. 15 l. 15	起上り,	起き上り,
p. 16 l. 2	立止まって,	立止って,
p. 16 l. 8	出遇う。	出会う。
p. 17 l. 4	「一人暮し？　前からずっと……」	「一人暮し……, 前からずっとか」
p. 17 l. 15	どうも……」	どうも」
p. 18 l. 1	可愛いい娘	可愛い娘
p. 18 l. 4	コールド・ビーフ	コールドビーフ
p. 18 l. 6	ご註文	ご注文
p. 18 l. 9	チーズ・ケーキ	チーズケーキ
p. 18 l. 10	ご註文	ご注文
p. 18 l. 13	食慾	食欲
p. 19 l. 1	くれたまえ」	くれたまえ」」
p. 19 l. 14	「子供向き？」	「子供向き……」
p. 21 l. 9	却って	かえって
p. 22 l. 1	硝子窓	ガラス窓
p. 22 l. 1	押し付ける	押付ける

文芸文庫版でのページ・行	講談社文庫版	全集版
p. 22 *l.* 3	停まる。	停る。
p. 23 *l.* 1	一たん	いったん
p. 24 *l.* 2	蒲団	布団
p. 24 *l.* 3	枕元	枕もと
p. 24 *l.* 7	蒲団の中	布団の下
p. 24 *l.* 7	差入れてきた。	差し入れてきた。
p. 24 *l.* 9	受け容れ,	受容れ,
p. 24 *l.* 9	忽ちのうちに	たちまちのうちに
p. 25 *l.* 6	癒らない	治らない
p. 25 *l.* 16	仕事は	仕事が
p. 26 *l.* 8	憎む気持	憎む
p. 27 *l.* 2	噛み切るって？」	噛み切るって」
p. 27 *l.* 7	ここで	ここに
p. 27 *l.* 9	いたの？	いたの。
p. 27 *l.* 9	いるの？」	いるの」
p. 29 *l.* 2	日暮れ	日暮
p. 29 *l.* 3	燈	灯
p. 29 *l.* 3	足早や	足早
p. 29 *l.* 9 —10	看做して	みなして
p. 30 *l.* 8	彼は	彼が
p. 30 *l.* 9	燈	灯
p. 30 *l.* 10	馴染み	馴染
p. 31 *l.* 3	集まり	集り
p. 31 *l.* 12	確かめる	たしかめる
p. 32 *l.* 7	合わさって	合さって
p. 32 *l.* 8	二十糎	二十センチ
p. 33 *l.* 1	訝しいいくぶん咎める眼に，女は戻り,	女は，訝しいいくぶん咎める眼に戻り,
p. 33 *l.* 16	一たん	いったん
p. 34 *l.* 1	立止まる	立止る
p. 34 *l.* 6 —7	立止まっていた。	立止っていた。
p. 34 *l.* 8	「きみは？」	「きみは」

文芸文庫版でのページ・行	講談社文庫版	全集版
p. 35 *l.* 8	ビヤ・ホール	ビヤホール
p. 35 *l.* 11	ビヤ・ホール	ビヤホール
p. 36 *l.* 5	仕事は？」	仕事は」
p. 36 *l.* 5	「矢添さんは？	「矢添さんは,
p. 37 *l.* 14	「待ち合わせ	「待合せ
p. 38 *l.* 5	心配なことでも？」	心配なことでも」
p. 38 *l.* 12	どういうわけ？」	どういうわけ」
p. 38 *l.* 14	お父さんに？	お父さんに……。
p. 39 *l.* 8	企らんでいるのか,	企んでいるのか,
p. 39 *l.* 12	照している。	照らしている。
p. 40 *l.* 10	立止まる。	立止る。
p. 40 *l.* 15	押し当てた。	押当てた。
p. 41 *l.* 5	硬張り,	強張り,
p. 41 *l.* 12	押し当てて,	押当てて,
p. 41 *l.* 15	可愛いいよ」	可愛いよ」
p. 42 *l.* 2	短い	短かい
p. 42 *l.* 13	可愛いいよ」	可愛いよ」
p. 43 *l.* 3	押し拡げられている。	押拡げられている。
p. 43 *l.* 4	押し当てている……。	押当てている……。
p. 43 *l.* 6	触れ合わす	触れ合す
p. 44 *l.* 12	来るの？」	来るの」
p. 45 *l.* 6	引剝すように取り去ってゆく。	引剝がすように取去ってゆく。
p. 45 *l.* 14	蒲団	布団
p. 45 *l.* 15	成行	成行き
p. 45 *l.* 16	確かだが,	たしかだが,
p. 46 *l.* 2	安堵するのか,	安堵するのか。
p. 46 *l.* 5	蒲団	布団
p. 46 *l.* 7	蒲団	布団
p. 46 *l.* 10	取り除いてゆく。	取除いてゆく。
p. 47 *l.* 4	輪廓	輪郭
p. 49 *l.* 1	僅かな	わずかな
p. 49 *l.* 2 —3	確かめようとする。	たしかめようとする。

文芸文庫版でのページ・行	講談社文庫版	全集版
p. 49 *l.* 4	持っている？」	持っているかな」
p. 50 *l.* 11	尾燈	尾灯
p. 52 *l.* 1	立止まったままでいる。	立止ったままでいる。
p. 52 *l.* 2	絡み合わせる	絡み合せる
p. 52 *l.* 4	酔	酔い
p. 52 *l.* 4	俯伏せ	俯せ
p. 52 *l.* 13	看做す	みなす
p. 53 *l.* 15	テーブル・クロス	テーブルクロス
p. 54 *l.* 1	比べて,	くらべて,
p. 54 *l.* 2	活発	活潑
p. 54 *l.* 3	僅かに	わずかに
p. 54 *l.* 6	散りばめられている	ちりばめられている
p. 55 *l.* 5	面映ゆくおもい,	面映くおもい,
p. 55 *l.* 9	女子大学生	女子大生
p. 55 *l.* 10	女子大学生	女子大生
p. 56 *l.* 7	押し開けながら,	押開けながら,
p. 56 *l.* 8	止まっていた。	止っていた。
p. 57 *l.* 1	僅かに	わずかに
p. 57 *l.* 3	昔	むかし
p. 57 *l.* 6	確かめようとして	たしかめようとして
p. 57 *l.* 8	分りません？」	分りませんか」
p. 57 *l.* 14	僅かの	わずかの
p. 57 *l.* 14	僅か	わずか
p. 58 *l.* 8	僅かの	わずかの
p. 58 *l.* 8	却って	かえって
p. 59 *l.* 8	ないの？」	ないの」
p. 59 *l.* 9	「停まって	「停って
p. 61 *l.* 2	おもった？」	おもった……」
p. 61 *l.* 3	「あら……」	「あら」
p. 61 *l.* 5	「違うわ……」	「違うわ」
p. 62 *l.* 2	電話機	電話器
p. 62 *l.* 3	断われば	断れば
p. 62 *l.* 4	電話機を	電話器を

文芸文庫版でのページ・行	講談社文庫版	全集版
p. 62 l. 4	電話機に	電話器に
p. 62 l. 5	電話機	電話器
p. 62 l. 5	一たん	いったん
p. 62 l. 6	立止まって	立止って
p. 62 l. 9	頁	ページ
p. 62 l. 11	頁	ページ
p. 63 l. 11	首筋	頸筋
p. 63 l. 16	「断った？」	「断った……」
p. 64 l. 3	かまわない？」	かまわないのか」
p. 64 l. 12	頸	首
p. 65 l. 16	寄添って	寄り添って
p. 66 l. 1	確かに	たしかに
p. 68 l. 7	「魔除？	「魔除けですって。
p. 68 l. 15	「嫉妬する？」	「嫉妬するかしら」
p. 69 l. 2	名残り	名残
p. 71 l. 5	却って	かえって
p. 72 l. 5	一たん	いったん
p. 72 l. 10	リビング・キッチン	リビングキッチン
p. 74 l. 5	皆	みな
p. 74 l. 11	フォーム	ホーム
p. 74 l. 15	取り巻く	取巻く
p. 75 l. 15	止まらない。	止らない。
p. 76 l. 14	「誰と？」	「え」
p. 76 l. 15	いいなずけとさ」	いいなずけと，喧嘩を……」
p. 77 l. 7	「あたしだから？」	「あたしだから」
p. 77 l. 9	押し返す	押返す
p. 78 l. 1	待つの？」	待つの」
p. 78 l. 16	「なにを？」	「なにを」
p. 80 l. 7	立止まった	立止った
p. 82 l. 12	不満ならば，却って	不満ならばかえって
p. 83 l. 2	いうのか？」	いうのか」
p. 83 l. 15	「誰に？」	「誰になの」
p. 86 l. 12	確かめようと	たしかめようと

文芸文庫版でのページ・行	講談社文庫版	全集版
p. 87 *l.* 7	繋がり	繋り
p. 87 *l.* 12	繋がり	繋り
p. 87 *l.* 13	繋がり	繋り
p. 88 *l.* 11	輪廓	輪郭
p. 90 *l.* 5 —6	立止まり,	立止り,
p. 90 *l.* 6	立止まり,	立止り,
p. 91 *l.* 5	看做す	みなす
p. 91 *l.* 8	名残り	名残
p. 92 *l.* 3	お別れするの？」	お別れするの」
p. 95 *l.* 4	スポーツ・シャツ	スポーツシャツ
p. 96 *l.* 5	「落ちない？	「落ちないって。
p. 96 *l.* 10	「違う人……？」	「違う人……」
p. 96 *l.* 14	どう？」	どう」
p. 97 *l.* 5	合わさった。	合さった。
p. 97 *l.* 10	引剝すと,	引剝がすと,
p. 97 *l.* 13	差込もうと	差し込もうと
p. 98 *l.* 7	微かに	かすかに
p. 99 *l.* 4	顔には, 確かに	顔にはたしかに
p. 100 *l.* 4	くる。	いる。
p. 100 *l.* 5	揺がない。	揺るがない。
p. 100 *l.* 6	僅かな	わずかな
p. 101 *l.* 12	重ね合わす	重ね合す
p. 102 *l.* 4	重ね合わす	重ね合す
p. 102 *l.* 7	確かに	たしかに
p. 102 *l.* 15	輪廓	輪郭
p. 103 *l.* 9	僅かの	わずかの
p. 104 *l.* 5	微かに	かすかに
p. 104 *l.* 8	揺がない。	揺るがない。
p. 104 *l.* 10	微かに	かすかに
p. 104 *l.* 12	僅かに	わずかに
p. 104 *l.* 14	僅かに, B子の	B子の
p. 105 *l.* 6	ウェーブ	ウェーヴ

文芸文庫版でのページ・行	講談社文庫版	全集版
p. 107 l. 2	しない。	しないで,
p. 107 l. 2	かならず,	かならず
p. 107 l. 4	彼が紀子を引張ってゆくが,	紀子を引張ってゆくのだが,
p. 108 l. 8	眺めている	眺めいてる
p. 109 l. 5	昂奮	興奮
p. 109 l. 7	きた？」	きたって」
p. 110 l. 3	押し開くように	押開くように
p. 110 l. 5	僅かに	わずかに
p. 110 l. 6	揺がない。	揺るがない。
p. 110 l. 10	輪廓	輪郭
p. 110 l. 10	取り上げると,	取上げると,
p. 110 l. 13	ビヤ・ホール	ビヤホール
p. 111 l. 7 —8	引繰返る。	引繰りかえる。
p. 111 l. 9	輪廓	輪郭
p. 111 l. 11	引繰返る	引繰りかえる
p. 112 l. 3	輪廓	輪郭
p. 112 l. 4	やがては,	やがては
p. 112 l. 10	成り立たせる	成立たせる
p. 113 l. 8	友だち？」	友だち」
p. 114 l. 4	「同じこと？」	「同じことだって」
p. 114 l. 10	「贈物？　いらないよ」	「贈物なんかいらないよ」
p. 114 l. 14	「近くに？」	「近くに……」
p. 115 l. 12	ロビー	ロビイ
p. 115 l. 16	附近	付近
p. 116 l. 2	合わせている	合せている
p. 116 l. 4	頸	首
p. 116 l. 4	合わせている。	合せている。
p. 116 l. 5	突き出した	突出した
p. 117 l. 3	擦り合わせる	擦り合せる
p. 117 l. 4	寄添って	寄り添って
p. 117 l. 13	奇跡	奇蹟
p. 118 l. 3	ロビー	ロビイ

文芸文庫版でのページ・行	講談社文庫版	全集版
p. 118 *l.* 3	差出した	差し出した
p. 118 *l.* 9	行渡らないうちに,	行き渡らないうちに,
p. 119 *l.* 13	呉れなくても	くれなくても
p. 120 *l.* 2	呉れた人	くれた人
p. 120 *l.* 10	バック・スキン	バックスキン
p. 120 *l.* 12	バック・ミラー	バックミラー
p. 122 *l.* 2	輪廓	輪郭
p. 122 *l.* 13	真面目な	まじめな
p. 123 *l.* 1	「違うな。それはたしかに,	「それはたしかに,
p. 123 *l.* 1	巻き込まれる	捲き込まれる
p. 123 *l.* 2	巻き込まれる	捲き込まれる
p. 123 *l.* 7	押し当てられた。	押当てられた。
p. 124 *l.* 2	真面目に	まじめに
p. 124 *l.* 7	あの子は？」	あの子は」
p. 126 *l.* 2	というの？」	というの」
p. 126 *l.* 6	というと？」	というと」
p. 127 *l.* 4 —5	継ぎ合わせる	継ぎ合せる
p. 127 *l.* 7	頗る	すこぶる
p. 129 *l.* 9	お名残りに,	お名残に,
p. 129 *l.* 16	スタンド・バー	スタンドバー
p. 130 *l.* 14	スタンド・バー	スタンドバー
p. 131 *l.* 4	差入れると,	差し入れると,
p. 132 *l.* 13	スタンド・バー	スタンドバー
p. 134 *l.* 6	立止まって,	立止って,
p. 135 *l.* 5	ですって？」	ですって」
p. 137 *l.* 6	燈	灯
p. 137 *l.* 10	燈	灯
p. 137 *l.* 12	燈	灯
p. 137 *l.* 14	燈	灯
p. 137 *l.* 15	電燈	電灯
p. 138 *l.* 2	あるの？」	あるの」
p. 138 *l.* 4	燈	灯

文芸文庫版でのページ・行	講談社文庫版	全集版
p. 138 *l.* 12	燈	灯
p. 138 *l.* 13	燈	灯
p. 138 *l.* 15	あげたのに……」	あげたのに」
p. 139 *l.* 8	あげたのに……」	あげたのに」
p. 140 *l.* 2	「あら……」	「あら」
p. 140 *l.* 8	決心	心
p. 140 *l.* 13	燈	灯
p. 141 *l.* 6	差込み,	差し込み,
p. 142 *l.* 9	酔	酔い
p. 143 *l.* 7	燈	灯
p. 143 *l.* 10	看做して	みなして
p. 144 *l.* 7	隣り合わせに	隣合せに
p. 144 *l.* 10	起上りながら,	起き上りながら,
p. 144 *l.* 11	看做す	みなす
p. 144 *l.* 11	却って,	かえって,
p. 144 *l.* 16 —*p.* 145 *l.* 1	平行になるまで,	平行になるまで
p. 145 *l.* 5	行く先	行先
p. 146 *l.* 1	どうだった？」	どうだった」
p. 146 *l.* 11	「どんなもの？」	「どんなもの」
p. 147 *l.* 5	必要なの？」	必要なの」
p. 147 *l.* 8	僅かに,	わずかに,
p. 148 *l.* 8	「どんなこと？」	「どんなこと」
p. 148 *l.* 16	お蒲団	お布団
p. 149 *l.* 6	何なの？」	何なの」
p. 150 *l.* 5	「迷惑なの？」	「迷惑なの」
p. 151 *l.* 4	押し付けられ,	押付けられ,
p. 151 *l.* 11	確かめながら,	たしかめながら,
p. 153 *l.* 1	遭わせて	あわせて
p. 153 *l.* 3	遭わせて	あわせて
p. 153 *l.* 9	引剝そうと	引剝がそうと
p. 153 *l.* 10	押し当てた。	押当てた。
p. 153 *l.* 11	「隠すな！」	「隠すな」

文芸文庫版でのページ・行	講談社文庫版	全集版
p. 153 *l.* 13	蒲団	布団
p. 153 *l.* 13	俯伏せ	俯せ
p. 154 *l.* 2	詰まっているのは,	詰っているのは,
p. 154 *l.* 9	引繰返した。	引繰りかえした。
p. 156 *l.* 5	押し返された	押返された
p. 156 *l.* 8	押し込まれた	押込まれた
p. 157 *l.* 4	昂奮	興奮
p. 157 *l.* 10	詰まっている	詰っている
p. 158 *l.* 1	どうしている？」	どうしている」
p. 158 *l.* 4	「あの青年……？	「あの青年……,
p. 158 *l.* 6	「恭一？	「恭一……,
p. 158 *l.* 8	「どうしている？」	「どうしている」
p. 158 *l.* 11	「どこかへ？」	「どこかへ」
p. 159 *l.* 3	そうおもい出したのは,	そうおもい始めたのは,
p. 160 *l.* 11	飛出してきた	飛び出してきた
p. 160 *l.* 12	尾燈	尾灯
p. 161 *l.* 13	飛降りてきた。	飛び降りてきた。
p. 163 *l.* 14	確かめるように	たしかめるように
p. 164 *l.* 11	きみのほうは？」	きみのほうは」
p. 165 *l.* 13—14	繋がり	繋り
p. 166 *l.* 6	尾燈	尾灯
p. 166 *l.* 10	真面目な	まじめな
p. 166 *l.* 11	真面目よ。	まじめよ。
p. 166 *l.* 12	確かに,	たしかに,
p. 166 *l.* 15	いいの？」	いいの」
p. 167 *l.* 1	受け容れる	受容れる
p. 167 *l.* 3	硬張った	強張った
p. 167 *l.* 5	いるから……」	いるから」
p. 167 *l.* 15	彼は煙草に関して	煙草に関して
p. 168 *l.* 5	差入れる。	差し入れる。
p. 168 *l.* 6	立止まって,	立止って,
p. 168 *l.* 12	強い日射し	日射し

文芸文庫版でのページ・行	講談社文庫版	全集版
p. 168 *l.* 13	糸がすべて絶ち切られて,	糸は，今すべて絶ち切られた。
p. 169 *l.* 9	現わす。	あらわす。
p. 169 *l.* 12	現れた。	あらわれた。
p. 171 *l.* 14	立止まって,	立止って,
p. 173 *l.* 6	輪廓	輪郭
p. 173 *l.* 7	輪廓	輪郭
p. 173 *l.* 13	飛込んでくる。	飛び込んでくる。
p. 173 *l.* 14	伸した	伸ばした
p. 173 *l.* 14	輪廓	輪郭
p. 174 *l.* 12	見比べている。	見くらべている。
p. 174 *l.* 13	短い	短かい
p. 175 *l.* 3	口から出さずに言った。	口から出さずに,
p. 175 *l.* 7	なにを……」	なにを」
p. 175 *l.* 8	立止まって,	立止って,

全集と文芸文庫との異同は少なく，誤植または見落としと思われるものだけである。

文芸文庫版でのページ・行	全集版	文芸文庫版
p. 19 *l.* 1	くれたまえ」」	くれたまえ」
p. 40 *l.* 10	キャベツが,	キャベツが
p. 50 *l.* 4	街燈	街灯
p. 50 *l.* 9	短距離競走	短距離競争
p. 108 *l.* 8	眺めいてる	眺めている
p. 154 *l.* 9	電燈	電灯